

時枝言語学のなかで核心を成すものは、やはり「詞」と「辞」の分離と結合に関する説だろう。「詞」と「辞」の関係は、日本語に固有の問題であるだけではなく、日本語から言語の本質を考え抜く鍵である。「詞」は、事物が、あるいは世界の諸事象が「概念化作用」を受けてできる言葉だと時枝は言う。彼が「概念化作用」と言う時には、質料的な無数の差異のなかに一定の同一性を持ち込む行為を指している。

「机」という「詞」は、事物の無数の差異に持ち込まれるひとつの同一性である。この世に二つとして同じ物はない。あの机も、この机も、みなことごとく違っている。なのに「机」というひとつの括りの概念ができる。そのように括る或る特異な、言語でなければ

ば為し得ない行為がある。「詞」は、その行為の結果できる。言語とは、こうした同一性の生産そのものことだとも言える。なぜ、同一性が生産されるのか。生の行動がそれを求めるからである。

あらゆる生き物は、質料的な無数の差異のなかに一定の同一性を設定することで生きる。馬は、あらゆる草を食べられる草のグループとそうでないグループとに二分する。そこには、すでに生による「概念化作用」の萌芽があると見える。が、馬はそれ以上の概念化を求めない。言葉による概念化は、人間だけが求める。これによって、人間がとれだけ遠大な未来を予測し、広範な過去を保存し、緻密な計算を立てて生きられるようになったかは測り知れない。このような概念化は、個々の人間が「陳述」という行為を通して実行するよりほかない。いつも誰かが誰かに対して、特定の場所で実行する「陳述」の行為があり、「詞」はそのなかで絶え間なく発生している。これが、「詞」が在ることについての時枝の考え方である。

「詞」は、陳述の行為のなかで不断に生まれてくる。「辞」とは、そのような陳述の行為そのものである。「机」という詞が、それだけで生まれてくるような世界は現実にはない。生まれるのは、たとえば「机だ」という陳述である。「だ」という「辞」がなけ

れば、陳述の行為はない。陳述の行為がなければ、「机」という「詞」が生まれることはない。これは、言語の起源に関する話ではなく、私たちの生活のなかで止むことなく起こっている出来事についての話である。

もちろん、「詞」を単独で取り出すことは、容易にできるだろう。辞書ではそうになっている。けれども、それはすでに陳述されたさまざまな言葉からの抽象によってである。「単語」の概念は、西洋文法においてはそれなりの具体性を持っている。なぜなら、ここでは「詞」はたいいていの場合「辞」と融合して「語」と呼ばれるものになり、陳述の具体的部分を作っていることが多いから。アルファベットの綴りを「単語」ごとに分けて書く書記法は、この事実に対応して生まれている。中国語内のひとつ漢字もまたそうした「単語」に当たるだろう。「詞」と「辞」が分離する日本語では、「単語」の区分は、抽象的にしか成り立たない。「春めく」という言葉は、二つの「詞」でできているが、そこに二つの「単語」を認めるのは、抽象によってでしかない。「春めく」は、二つの「詞」が「統合」されてできるひとつの概念を作っている。

「めく」が、単独で取り出されることのない詞であることは、日本語を話す誰にも感じられている。それをするのは、抽象によってである。しかし、「春」という単独の詞もまた陳述からの抽象によって取り出されるものであることには、人はなかなか気付かないだろう。詞が概念化作用という（行為）のそとにないことには、気付かないのである。辞はその行為を直接に担う。

「春めかず」という言葉には、二つの詞とひとつの辞の結合がある。したがって、ここには、ひとつの陳述があると言える。詞と詞は、言葉の連続のなかで互いに浸透し、包摂し合い、次第に大きな概念となっていくことができる。「花咲く園」は、三つの詞が言わば雪だるま式に膨らんでひとつの概念を成していく。時枝は、詞と詞の間に起こるこの浸透、包摂、膨張の作用を「統合」と呼んでいる。そこに辞が結合することによって、三つの詞は「総括」される。「花咲く園か」という言葉は、ひとつの質問の陳述となつて「花咲く園」を「総括」している。「（そう、）花咲く園」とそれに答える人がいるならば、辞は「零記号」となつて「花咲く園」を総括している。たとえば零記号となつた「です」や「だ」がそこにある。

浸透、包摂、膨張の作用に対して、それらを総括する辞の働きがある。総括とは何か。概念化された「客体」を、言語を用いる「主体」がひと包みにする行為だと時枝は言っている。ここでは、「主体」「客体」という言葉を認識哲学の狭い意味合いで受け取って

はならないだろう。話す者も聞く者も(あるいは書く者も読む者も)いないところでは、言葉は存在していない。「主体」は、言葉が在るための第一の条件である。しかし、それと同じく「主体」は(何か)について話し、聞くのでなかったら、話しも聞きもしないのだ。その(何か)を「客体」と言っている。客体が概念化されて生じるさまざまな詞が、互いに浸透、包摂し、膨張していき、主体は辞によってそれらをひと包みに総括する。いや、もっと正確に言えば、詞の互いの浸透、包摂、膨張は、辞による陳述に向かって、辞をひとつの磁場とするような働きで集まってくる。

辞を辞とするような主体の行為があり、そこにさまざまな詞が互いに浸透し合いながら集結してくる。浸透し合うことは、詞の本質であるだろう。詞はひとつの「言語単位」であるが、このような単位が何であるかについての、時枝の規定は見事なものである。(ひとつの詞)とは、概念化作用の、あるいはその経験の「一回的過程」として現われてくるような「質的統一」のことを指す。言い換えれば、言語単位とは、概念化作用という経験がそのなかに持つ質的な「一回性」のことにほかならない。このような統一は、限りなく伸縮し、自己を開いて他と浸透し合う。それは、近代科学の原子モデルとまったく異なる仕方での運動する。

科学的原子は、全体を分割して、それ以上分割できない最小単位として取り出される。それらが集合して全体が構成される、というわけである。言語に対してこのような原子論的モデルを適応することは不可能である。言語単位としての詞は、全体から引き出される原子ではない。さまざまな詞は、辞という磁場に向かって絶えず浸透、包摂、膨張の運動を繰り返す質的単位としてしか考えることができない。詞の運動は辞の吸引によって発生し、辞はそれらの運動を陳述という行為のなかに包み取っていく。この時、部分(単位)は運動であり、全体(陳述)は運動を引き起こす潜在的な力である。時枝の直観のなかにあったものは、このような一種の動的イメージであり、それは彼にとって常に語り難いものだっただろう。そして、彼の「言語過程説」に、すみずみまで強い魅力を行き渡らせているものが、この語り難いイメージであることは、疑いようがない。

全体を見通しての部分の構成、という原子論的モデルは、言語分析のあるゆる局面において誤る。言語学にとって必要なものは、質的単位の運動を「統合」し、その統合を「総括」するような陳述の力についての理論である。

「匂の高い花が咲いた」という陳述についての、『国語学原論』の鮮やかな分析を例に取ってみよう。この陳述は、「匂の高い花が咲く」という事実全体を包む「総括」とし

て成り立っている。その総括は、「た」という辞によって行なうと言ってよい。しかしその総括の内部には、「句の高い花」を総括する「が」の働きがあり、またその総括の内部に「句の高い」を総括して「花」に包摂させる「零記号」の辞がある。さらにまたその総括の内部には、「句」を総括し、それを「高い」という詞の主格として浸透させる「の」という辞の働きがある。詞は次々に辞によって総括され、それらの総括は積み重なって最後の辞「た」によって最も大きく総括される。陳述とは、質的単位のこのような相互浸透であり、包摂、膨張であり、その最終的総括である。

時枝は、辞による詞の総括を「風呂敷型構造形式」と言い、継起するさまざまな総括の、そのまた総括であるような陳述の全体を「入子型構造形式」と名付けている。しかし、このような呼び方は、「構造形式」なるものが好きな言語学者たちへのほんの挨拶に過ぎないだろう。時枝にとって、探究し、説明すべきものは構造形式ではない、言葉を出現させる陳述の力そのものである。

「句の高い」と「花」との間には「零記号」となった辞が働いていると彼は言っていた。それなら同じように「花咲く園」にも、「花」と「咲く」との間には「花」を総括するひとつの零記号があると言えるだろう。「花咲く」と「園」との間にも「花咲く」

を総括する零記号があると言える。この零記号とは一体何か。これが詞と詞とを浸透、包摂、膨張させる陳述の力そのものでないのだとしたら、これほど曖昧な用語はない。「花！」という言葉では、「だ」や「です」が単に省略されて零記号になっているのではない、辞が潜在的な陳述の力そのものとなって、「花」という詞を言葉のなかに顕われさせているのである。

したがって、詞と辞を分けるものは、品詞の区分のようなものではない。概念的意味の強弱でもない。包むことと包まれることの間にある作用の方向の違いである。ひとつの作用(言語表現)のなかにある二つの方向が、詞と辞の性質の差異を生んでいる。詞がなければ辞はないだろうが、同じように辞がなければ詞の発生はない。つまり、表現という作用の全体が存在しなくなる。語があり、統語法があり、その後文ができる、という考え方に慣れた者には、このことは理解し難い。

『国語学原論』のなかで、時枝が詞と辞の「転換」の事実について詳しく述べていることは重要である。詞は辞に転換することがあり、またその逆もある。たとえば、「ある」という動詞は存在の概念を表わす詞であるが、同時に辞としても働く。「山がある」の「ある」は詞だが、「山である」となれば「ある」は肯定の陳述を為す辞になる。が、

そのこととは別に、存在詞の「ある」が捨れて辞に転換することもある。「いかなる人か」では、「ある」は「に」と結合して「いかなる」という辞の用法に転じてしまう。また、たとえば、「切符を切らない」という表現では「ない」は否定の陳述を為す辞である。が、「切符の切らない人はいませんか」と車掌が言う時には、「ない」は「切る」と連結、統合されて「切らない(未購入の)」というひとつの詞に捨れ、転換している。「切符の赤い」と同じ仕方です。「切符の切らない」という表現が成り立っているのである。

詞と辞の間の捨れによる転換は、実際にはいたるところで起こりうる。日本語は、その可能性で満ちていると言っている。詞は固定された語でも、品詞でもない。辞という陳述の力が生み出す諸単位の質的運動そのものである。この運動は、いつでも捨れて諸単位を生み出す陳述の力に転化しうる。辞もまた同じことだ。陳述の力である辞は、いつでも別の辞に包み返されて詞に転化してしまう。

詞と辞とが分離し、また微細に転換し合う日本語では、さまざまな詞は辞という磁場、陳述の力に向かって浸透、包摂し合い、そこで言語的な諸単位を成すことがはっきりしている。はっきりしている、ということが日本語の特質なのであって、陳述の力が諸単位の質的運動を生む、ということそれじたいは、まさに言語の普遍的本質にほかならないだろう。つまり、日本語的なものの徹底した反省が、言語の本質を捉える上でいかに有効な試みであるかを、時枝誠記の言語学は示しているのである。

詞と辞とが融合した言語を対象とした時、原子論的言語観、あるいは言語構成観は、どんな形であれ避け難くつきまとうと時枝は見た。日本語を対象とした言語学こそ、この観念を打ち破るものでなくてはならないと。この志は、そのまま本居宣長のものだと見える。漢字、漢文との永い永い格闘がもたらした日本語の言語学は、近世国学の「てにをは」研究のなかでついにその明確な表現と自覚とを得た。万葉人が「言霊の幸ふ国」と歌ったこの国の言霊とは、「てにをは」のことであると近世国学者たちは深く信じた。漢字による倭語の表記、限定を逃れるもの、そこに言霊の顕わになった働きがある。辞の働きが示す(陳述の力)がある。古語への讃仰に満ちた彼らの注釈学は、このような辞の働きをめぐる言霊学にほかならなかった。時枝の言語過程説は、ヨーロッパの近代言語学に正面から対峙することを強いられた者が、魂の総力を挙げて展開したこの言霊学ではなかったか。

『国語学原論』における「各論」の構成は、「音声」「文字」「文法」「意味」の理論へと続いていく。この構成は、時枝自身が言うように(『国語学原論 続篇』)、まさに「言語

構成観」の分類法に対応して、時枝言語学本来の説き方に従うものではない。近世国学のうちにあった言霊学が、こうして近代言語学の理論的構成を精確に得る、そのことに彼は苛立っていたに違いない。けれども、この本は、まさしくこのようにして書かれなければならなかった。それが、自分の避けられない使命であることを、時枝はたった一人で感じながらこの本を書いた。

この本の「総論」で中心を成す部分は、昭和十二年の六月と七月に『文学』誌上で発表された論文「心的過程としての言語本質観」のなかにすでににある。『国語学原論』の刊行は昭和十六年十二月、日米開戦のその月になった。この本のための懸命の理論構築が続いたのは、昭和十二年から十六年までの四年間だったが、当時を回想して時枝は言っている。「堤の水は、遂に切って落された。もはや私は敢然として、この激流を泳ぎ切るより外に生きる道がないことを自覚した。「中略」死出の装束を纏った獅子奮迅の姿、それは昭和十二年から十六年に亘って、殆ど毎月論文を執筆した私の姿であった」『国語学への道』。

戦局の混乱が極まるなかで、このような志に正当な注意を払った者など、ほとんど誰もいなかった。またその扱いは、戦後の混乱期も変わりない。『国語学原論』が少しづつ思想的検討の対象となり始めたのは、昭和三十年代に入ってからのことだろう。時枝誠記の言語学が、戦後日本の左右のイデオログから、敵にも味方にも見えたということとは面白い。近代唯物論へのこの鋭利な敵対者は、安直なナショナリストの厄介な敵ともなりえた。

もちろん、時枝の言語過程説は、二十世紀言語思想の広範な文脈のなかで捉えられていい。彼の言う「言語構成観」を、彼と類似する立場から批判した思想家は何人もいる。たとえば、パースの記号学、ウイトゲンシュタインの言語ゲーム論、バフチンのダイアローグの哲学、メルロ＝ポンティの言語の現象学、オースティンの言語行為論などは、その範疇に入ると言っている。しかし、そういう比較をするよりも、時枝が近世国学の「てにをは」研究を引き継いだ、その強い志の奥深くに入り込んでみることのほうが重要だ。彼の本領は、言語過程説を主張する「総論」よりも、「詞」と「辞」とのめまぐるしい関係の細部へと分け入る「各論」にある。そこで掬い取られる言霊の働きに驚嘆してこそ、私たちは『国語学原論』の読者たりうるのである。